

第1回 倉敷市生物多様性地域戦略推進委員会

指摘事項

(1) 地域戦略実施事業の進捗について

「地域戦略」は「短期目標・生物多様性の損失を止める」、「長期目標・生物多様性をより豊かにする」としている。この場合の「生物多様性」を具体的に定義することが必要であるし、できれば数値化することがベターである。具体化された「生物多様性」を基礎にして、策定済の地域戦略の施策体系を強化することにより、より確かな生物多様性を保全することができる可能性がある。

基礎データとして倉敷市の生物多様性をどう把握したらよいかを検討しこの委員会で提案したらどうか。例えば、次の5つの項目について指標としてはどうか。
①森林の面積②農地の面積③水路・河川・池沼④海岸・干潟・藻場⑤野生生物種
例えば希少種。

5つの評価指標、および対応する数値目標から策定済の地域戦略の施策の再整理が可能となるので再整理を行う。また、さらに新たな施策の構築に多くの示唆が得られる。

自然史博物館が出している生物目録は古くなっているため、自然史博物館と協力しながらデータを作ってもよいと思う。

この委員会に自然史博物館の学芸員を入れるべきではないか。生物種等について基礎データに基づく話が出来ない。

推進委員会では、検討するばかりではなく、具体的に市民が活動やイベントに参加できるような、市民から応援してもらえるような象徴的なことについて議論し、発信していくのが良いと考える。

市民（子どもから大人まで）や行政と一緒にできる保護移動などの活動を提案していけるような会にしたい。

リーディングプロジェクトについてプロジェクト全体を見せられると難しい。事前に整理をしてほしい。

リーディングプロジェクトの中に優先順位をつけたほうが良い。

自然環境条例があるが、新しい生物多様性条例を作ったらどうか。

新しい条例の必要性の背景として、1974年制定の倉敷市自然環境保全条例は、当時としては先進的な条例であった。しかし、40年を経ており、その条例の内容と新たに策定された生物多様性地域戦略には大きなギャップがある。策定された地域戦略には、これまでの自然環境保全条例の理念、関連諸施策をカバーするとともに、それらを超え、最近の全国的・国際的な動向である生物多様性保全の考え方を踏まえたものとなっている。また、倉敷市の今後の基本的なあり方について、産業活動・市民生活全般に関わる内容をもっており、地域環境保全の今後の展開における新しい枠組みを示唆するものとなっている。こうした経緯・現状、策定された地域戦略の内容を勘案すると、環境保全における今後の展開の枠組を定めた新しい「生物多様性条例（仮称）」を制定し、これからのあり方を市民、議会、行政、事業者、関係民間団体等が共有することが望ましい。その上で、地域戦略を新条例の中に位置づけることが望ましい。

条例改正については、環境審議会でも条例改正、諮問、答申を受けてもらい、審議会の小委員会の様な形で生物多様性に関する部分をこの会で考えるのが現実的だと思う。

(2) 地域戦略の広報について

ア：地域戦略概要版について イ：地域戦略概要版（子ども用）について

イ 自然への人の影響を紹介している内容に関して、自然への悪影響ばかり取り上げると人が悪者になってしまい、悪者になりたくない子どもたちの自然への関わりが消極的になってしまう恐れがある。人の関わりによって成り立っている自然もあるのだから、人の活動による自然への良い影響といった前向きになれるようなことも盛り込んだほうがよい。

イ 生き物たちの紹介をするだけでなく、観察会等のイベントに行くことを促すような内容がよいのではないか。

イ 博物館の施設の紹介より、博物館や、博物館友の会や水島財団などが提供するアクティビティを示し、自然体験を促すようなものがよい。

- ア 裏表紙の Plan Do Check Action の Action だけ名詞になってしまっている。こだわる人もいるので表現を検討すべきである。
- イ 自然体験と生き物の紹介がセットになっているようなものがよい。
- ア 行動計画の中に具体的にどうしていく、というものが無い。本当に課題に立ち向かっていくのかというところが伝わらない。
- ア 3つの生物多様性の所で、一つだけサンゴ礁という岡山にないものが入っているので、アマモ場とかにしたほうがよい。
- ア 市街地の将来像で、「屋根瓦の間からツメレンゲが伸び…」のところは、非常にハードルが高い。その下の屋上緑化の所にツメレンゲを入れてはどうか。
- イ 「解決しなければ…」を「考えなければ…」にしたほうが、子どもには、わかりやすい。
- イ 「人の活動が原因で生き物がへっています」の下で、「捨てた釣り糸が…」を本文に加えたほうが良い。
- ア 行動計画の基本目標1のナウマンゾウの写真が暮らしとのつながりを感じにくい。
- イ 倉敷の生き物たちの紹介の所で、写真の選択は良いが、写真を見せるだけでなく、子どもが外へ観察に行きたくなるような表現にしたほうが良い。
- イ 最近は自然体験の少ない親も多い。子どもだけでなく、親が見ることも想定して親子で行きたくなるような提案を行ったほうがよい。
- イ 子ども達が興味を示すのは、ゲームやテレビであるから、自然観察会等のイベントを行う際には、その時子どもの中で流行っているものに乗るのも良い。

(3) その他

委員会が年1回では課題を十分に詰めることができない。年数回行うことを期待したい。